

令和元年6月7日現在

機関番号：32403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16876

研究課題名(和文) アジア民衆史の多重境界性に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on Overlapping boundaries of Popular History in Asia

研究代表者

石井 龍太 (Ishii, Ryota)

城西大学・経営学部・准教授

研究者番号：00712655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アジア民衆史を地理的、歴史的、政治的、社会的境界を帯びた「多重境界性」の観点から取り上げて新たな歴史像を探ることを目的とし、琉球諸島の集落において発掘をはじめとする学際的調査を行った。

研究を通じ、近世琉球期の社会的境界は18世紀には動揺していたこと、19世紀後半の政治的境界は周縁地域にも明瞭に現れる歴史的境界でもあったこと、近世琉球期の諸要素は20世紀後半まで根強く残ること、琉球諸島と奄美諸島の間には地域内の地理的境界が政治的境界と重複することが明らかとなった。琉球諸島の多重境界性は災害多発期とされる18～19世紀に強まり、今日に繋がる地域の特徴が形成されたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

低調な民衆史を学際的に取り上げ、多重境界性の観点から新たな歴史像を探った点に本研究の学術的意義がある。近世琉球期の社会的境界が18世紀には動揺していたこと、19世紀後半の政治的境界は周縁地域にも明瞭に現れ、琉球諸島全域に及ぶ歴史的境界だったこと、前時代の要素も受け継ぐ独自性が20世紀後半まで根強く残り、かつ琉球諸島と奄美諸島の間には地域内の地理的境界が政治的境界と重複することが明らかとなった。また本研究の社会的意義として、災害多発期とされる18～19世紀に琉球諸島の多重境界性が強まり、今日に繋がる地域の特徴が形成されていったことを明らかにした点が挙げられよう。

研究成果の概要(英文)：This research project's goal was to seek out a new historical view of a Popular History in Asia, from "Overlapping Boundaries" point of view that straddles the border between geography, history, politic and sociology. I carried out an interdisciplinary investigation into the villages of Ryukyu Islands, including with an excavation.

Through this research, it became clear that the social borders in the early modern period in the 18th century Ryukyu Islands were fluid, that political borders in the latter half of the 19th century were also historical borders clearly appeared in peripheral areas, that elements of early modern Ryukyu persisted through to the latter half of the 20th century, and that geographic and political boundaries overlap between the Ryukyu Islands and Amami Islands. The Overlapping Boundaries of Ryukyu Islands strengthened in the period of disasters in the 18th and 19th centuries, which can be thought of as formative of the region's modern particularity.

研究分野：歴史考古学

キーワード：考古学 近世史 近代史 集落 屋敷跡 琉球諸島 豚小屋

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究と直接かかわる先行研究に、「中心」「周縁」の観点からのアジア史研究が挙げられる(関西大学『周縁の文化交渉学シリーズ』他)。報告者は中国の周縁としての琉球史を考古学の手法から取り上げる作業において参加した(2012年「瓦と琉球 ~王権、制度、思想、交渉~」)が、そこで見えて来たのはこうした概念だけでは捉えられない部分であった。特に17世紀以降の琉球諸島は、中国と共に日本からも政治的周縁と位置付けられていたとされる。また東アジアと東南アジアの「境界」となる位置にあり、それぞれの文化要素を兼ね備える。そしてこの関係は入れ子構造をなしており、奄美諸島を琉球諸島と薩摩の地理的・政治的境界と位置付ける見方も可能であろう。

但しこれらの境界は線では無く地域である。線は遮断する壁となり得るが、地域はしばしば中心からの影響と共に隣接地域の要素が重なり合って混在し、「多重境界性」とも呼べる独特の世界を形成する。近世近代期の琉球諸島は、さらに歴史区分においても「多重境界性」を帯びていた。琉球諸島の近代化は日本本土と異なる展開を遂げ、また考古学の成果からみた時には決して明瞭なものでは無く、前時代の要素がかなり後まで存続することが確認されている。さらに身分制度を原則としつつも流動的であったことが論じられており(例えば、若手研究B「近世琉球の流動的身分に関する基礎的研究」代表:山田浩世)社会階層における多重境界性の存在も想定されよう。琉球諸島の近世近代期は、政治、地理、歴史、社会といった様々な意味での多重境界性を帯びていたと考えられる。

そして境界世界の主役は支配者層ではなく民衆である。文字を残さない民衆の歴史研究はまだ乏しく、物質文化研究を特色とする考古学が寄与できる部分は大きいと期待される。開発に先立つ都市部の遺跡が日本の発掘調査の中心であり、考古学が価値を発信しやすい民衆史研究は未開拓の分野だが、近年は報告者を含め、調査例の乏しかった南西諸島の地域や対象を取り上げる学術調査が増加しつつある(例えば、基盤研究C「近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究」代表:渡辺芳郎氏)。社会的境界に関する考古学研究も例が少ないものの、文献史学では上述した山田浩世氏による研究が遂行中である。また神奈川大学による絵図資料からの琉球民衆史研究(COEプログラム「人類文化研究のための非文字史料の体系化」)も注目される。抽象的事項まで記載された文献史料や、具体的な景観まで描かれた絵図の分析は、多くの情報を提供するものと評価されよう。琉球諸島を含めた南西諸島の民衆史は近年様々な分野から注目されている。そしてそれぞれのアプローチの長所短所を生かし学際的に遂行する必要性も浮かび上がらせている。遺跡調査では腐敗しやすい有機物資料は出土せず、また精神文化など抽象的な事柄を追究するのは難しい。一方で文献や絵図は為政者によるもので内容に偏りがあり、また時代地域を総じて追究するには断片的すぎ、遺跡調査による連続した層ごとの文化内容の検討と合わせて成果を検討する必要がある。

こうした動向と合わせ、これまで報告者が行ってきた調査研究もアジア民衆史の多重境界性に注目する景気となった。研究代表者を務めた「災害と交流からみる近世アジア民衆史の考古学研究」(研究活動スタート支援 2013~14年度)では、石垣島の安良村跡の発掘調査を行った。また琉球諸島を中心に個人消費の豚飼育について、各地に残る遺構を集成し比較し畜産技術の交流を探る調査を実施した。何れも過去に無い研究であったが、その成果は当初の目論見とは異なっていた。安良村跡は石垣島の北部に位置し、18世紀から20世紀初頭に位置づけられる。文献史料によれば18世紀末に津波被害に遭い、その後マラリアの蔓延に苦しんで廃村に至ったという。発掘調査では津波堆積層を絞り込み、津波を挟んだ集落の復興と変化の様子を実証的に確認した。また19世紀後半には琉球王国から日本国沖縄県へいう国体の変化を経験しているが、同時期に日用品が日本本土産主体へと変化することを確認した。民衆史は中央の政治的動向を反映し、かつ近代化は津波以上に民衆生活に大きな変化をもたらしたが、一方で前時代の要素も根強く残ることがうかがえよう。

またこれまでの研究のもう一つの骨子であったのが、家庭内での豚飼育である。豚はハレの食材として近世琉球社会の重要な要素であったとされる。安良村跡でも豚小屋が確認されており、1970年代まで各地で継続して飼育されたことが報告者の民俗調査によって確認された。しかし地域ごとの文化的差異が激しい琉球諸島内において豚小屋の多様性は乏しく、規格がどこでも一致することも確認された。そしてこれまでに調査を行った奄美諸島の豚小屋とは差異が大きいことも判明した。

2. 研究の目的

本研究は、奄美・琉球諸島を具体的なフィールドとし、近世近代アジア民衆史における「多重境界性」を実証的に追究し、新たな歴史像を提起することを目的とした。

そして前述の通り、報告者がこれまで行ってきた調査研究活動の中で浮かび上がってきた課題も対象とした。かつて調査した安良村跡は琉球諸島の地理的周縁の代表例とみなしうる集落遺跡であり、地理的・歴史的な多重境界性を強く帯び、首里城はじめ支配者たちの調査例と対置される価値ある事例と評価できる。次に必要なステップは両者の中間、すなわち地域の拠点集落や、農村の土族集落といった社会的な多重境界性を帯びた対象を選択し、支配者と民衆を連結して全体を把握し理解する研究であるといえよう。また奄美諸島と琉球諸島の豚小屋の比較は、近世近代に引かれた政治的境界と豚小屋の分布域とが一致すること、個人消費の豚飼育という行為は共通するものの飼育方法に差があるという普遍性と個別性を浮かび上がらせた。奄

美諸島が琉球諸島と九州との間の境界地域であることを反映した現象であると推察され、よりデータを充実し検討を加えて行く必要があるだろう。

研究期間内に、地理、歴史、社会それぞれの多重境界性を帯びた遺跡、遺構を対象とした4つの課題研究を行い、特に物質文化からうかがえる民衆史を追究した。

沖縄島における土族層の近世近代農村集落の展開

先島諸島における近世近代集落の展開

宮古島における15世紀以降の集落の展開

奄美諸島における個人的豚飼育の展開

このうち、は調査研究の過程で調査の必要が生じた課題である。近世・近代の境界のみならず、重要な論点となる近世琉球期以前との境界研究として課題に加えた。そしてこれらの研究対象それぞれの分析に必要なデータを獲得し、相互に比較することで地理的、歴史的、社会的な多重境界性に関する実証的な検討を行った。具体的には、から地理的多重境界性を分析した。またと首里那覇に関する先行研究を総合することで社会的多重境界性を具体的に分析した。そしてが共通して帯びている近世・近代・現代の歴史的多重境界性を分析した。

3. 研究の方法

本研究には考古学、民俗学を始めとする学際的研究手法を用い、研究対象である近世近代遺跡において実証的に研究を遂行した。関連する先行研究では文献、絵図に限定される例が多かったが、特に考古学的調査は省かれる傾向にあった。しかし文字や絵図は為政者による間接的な民衆史の資料であり、直接民衆生活を反映する物質文化を調査することで、より実証的な議論が可能になる。こうした調査手法が大きな力を発揮することは、報告者のこれまでの調査研究でも明らかである。そして調査成果を総合し、先行研究および報告者の過去の研究蓄積と突き合わせることで、多重境界性を帯びた民衆史から見えてくる新たなアジア史像を追及した。

具体的な研究対象として、上述した4つの課題それぞれに対応するように、発掘調査を中心とする琉球諸島での3つの考古学調査と、遺構調査を中心とした奄美諸島での豚飼育に関する民俗調査を実施した(図1)。

(1) 沖縄島南部 底川村跡

近世琉球期から1960年代まで存続した、農耕生活を行っていた土族層「屋取」の集落とされる。現在、遺跡は森林内となっているが、極めて良好な保存状態にあった。集落内の中央に位置する「照喜名邸」の調査許可を得、発掘をはじめとする調査を実施した。屋取という社会的境界性を帯びた集落であると共に、近世、近代、現代と存続し幾つもの歴史的境界を経験した集落であることから、本研究において極めて良好な対象といえる。

(2) 西表島南西部 崎山村跡

戦後まもなくまで存続した集落で、近世琉球期に首里の王府によって村立されたとされ、番所も存在したとされる。かつて西表島南西部には網取村、鹿川村も存在したが、崎山村は拠点集落であった。(1)の底川村跡と同じく幾つもの歴史的境界を経験した集落であり、調査を踏まえて琉球諸島内での集落の比較研究が可能になることも期待された。

(3) 宮古島北部 狩俣集落

近世琉球期以前から現代まで存続する集落であり、伝承では12世紀まで遡るとされる。かつて集落全体が囲壁されていたとされ、民俗行事ユークイの舞台としても知られている。これまで報告者にとって未調査地域であった宮古諸島におけるフィールドであり、また底川村跡や崎山村跡以上に歴史的境界性を帯びている可能性が予想された。

(4) 奄美諸島の家庭内豚飼育

琉球諸島からみて九州以北の日本列島は、中国と並び伝統的に中央の一つであったと考えられるが、その中間に位置するのが奄美諸島である。同地域には琉球諸島と強く関連すると予想される文化要素が独自化しつつ展開しており、そのひとつが家庭内豚飼育の伝統である。すでに徳之島、奄美大島北部で豚小屋遺構を確認していたが、その成果を踏まえ、不明な点の多い奄美大島中南部、さらに周辺諸島の集落において残存する豚小屋の形態を観察し、これまでに収集した琉球諸島のデータと比較することで両地域の特徴を検討する調査を実施した。

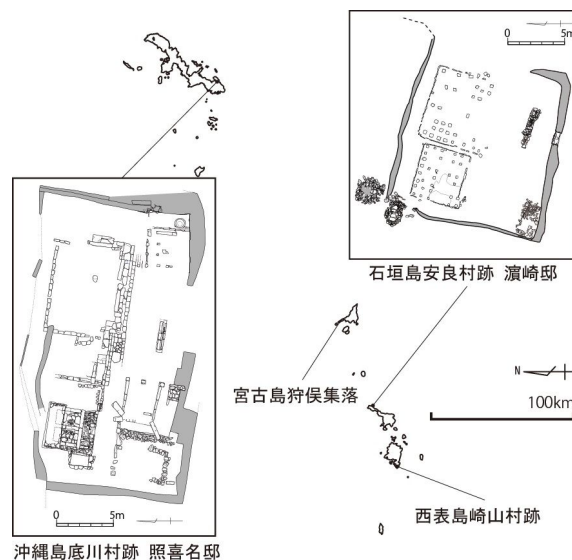


図1 本稿で扱う集落、集落跡

4. 研究成果

対象地の一つとした(1)沖縄島底川村跡では、調査によって居住適地とは必ずしもし得ない斜面地に、谷地形の制約を受けながら集落が築かれたことがうかがえた。また発掘調査によって18世紀代まで遡ることも確認された。さらに屋敷地に残る大型石材を用いた建築物(図2)や瓦は土族層を象徴するが、屋敷地内の構成は一般的な農村と共通点を持ち、これら社会的歴史的境界を帯びた生活史が存在したことを具体的に明らかにすることが出来た。

(2)西表島崎山村跡の調査では、森林内に保存された集落遺跡の様子が確認された。底川村跡と同じく斜面地に形成されており、自然発生集落でなく上からの強制力による村立てであることを反映しているといえよう。そして強制力が消滅した後、近代と現代の歴史的境界の中で廃村となったと考えられる。遠浅の入り江の奥にあり、辿り着くことすら困難な遺跡であるため時間をかけた調査は出来なかったが、東海大学文学部の調査チームに随伴して踏査を行い、集落内の遺構、遺物を確認した。また海蝕崖に集落の屋敷地の断面が確認され、近世琉球期から近代までの物質文化の変化を連続的に追えることも確認された。文献の記載と同じく18世紀以降に村立されたと推察される。さらに文献史料やかつての村民の方への聞き取り調査も実施した。先に実施していた安良村や網取村の調査成果と比較し、先島諸島の各地で18~19世紀に大規模な人口減少が発生していることを確認した。

(3)宮古島北部に位置する狩俣集落では、かつて全周を囲っていたとされる平面方形の囲壁の残存部において発掘調査を実施した。集落南東の縁辺部に位置し、多くの遺物が表採されるため廃物置き場として長く利用されてきた可能性があり、集落の歴史が堆積していると予想されたことから、集落の経験した歴史的境界を確認できると期待された。また直線的な囲壁を伴う集落は大陸部に類例があり、地理的境界性を反映した交流の結果としてもたらされた可能性も予見された。しかし発掘の結果、調査地点は近代以降に構築された可能性が高いと判断される結果となった。一方で、地籍図や周辺諸施設の位置関係を考えると、かつての囲壁は調査地点に存在した可能性が高いと考えられる。すなわち一度崩された囲壁が同じ場所に再建されたと予想されることから、近代期を経てそれ以前の要素が再興され、歴史的境界を超えて今日まで存続し続けたと考えられよう。

(4)奄美諸島における伝統的な家庭内豚飼育施設の調査では、19世紀前半から20世紀まで変化しつつ存続する琉球諸島とは相違点が多いこと、特に大型石材を用い、屋敷神が宿る聖地とも位置づけられるといった特徴が見られないことが確認された。一方で豚小屋は堆肥生産や人糞処理といった多機能の場であり、豚はハレの食材であるという位置づけは共通することも確認された。こうした要素は韓国済州島の豚飼育施設にも共通する。すなわち地理的歴史的境界を超える要素と、境界の影響で変容する要素が存在することが明らかとなった。

4つの実証的調査研究を通じて見えてきたのは、琉球諸島を巡る多重境界性の形成と変化である。近世琉球期の社会的境界は18世紀には動揺していたこと、19世紀後半の政治的境界は周縁地域にも明瞭に現れ、琉球諸島全域に及ぶ歴史的境界だったこと、前時代の要素も受け継ぐ独自性が20世紀後半まで根強く残り、かつ琉球諸島と奄美諸島の間には地域内の地理的境界が政治的境界と重複することが明らかとなった。また本研究の社会的意義として、災害多発期とされる18~19世紀に琉球諸島の多重境界性が強まり、今日に繋がる地域の特徴が形成されていったことを明らかにした点が挙げられよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

石井龍太「琉球諸島、奄美諸島、済州島における豚飼育施設」『南島考古』34、査読なし、2015年、47-60

石井龍太、北條芳隆、河野裕美「西表島崎山村跡 2015年度現地予備調査報告」『西表島研究 2014』東海大学沖縄地域研究センター所報、査読なし、2015年、32-43

石井龍太「南城市知念 底川村跡の遺構調査」『しまたてい』78、査読なし(依頼原稿)、2016年、4-8

石井龍太「考古学研究会第63回総会研究集会報告(下) 近世琉球における津波被害と村落変遷 石垣島安良村跡発掘調査を中心に」『考古学研究』64-3、査読なし(依頼原稿)、2017年、47-59

石井龍太「考古アカデミックレポート 近世近代期の琉球諸島にみるアジア民衆史の「多重境界性」」『考古学ジャーナル』718、査読なし(依頼原稿)、2018年、48-49

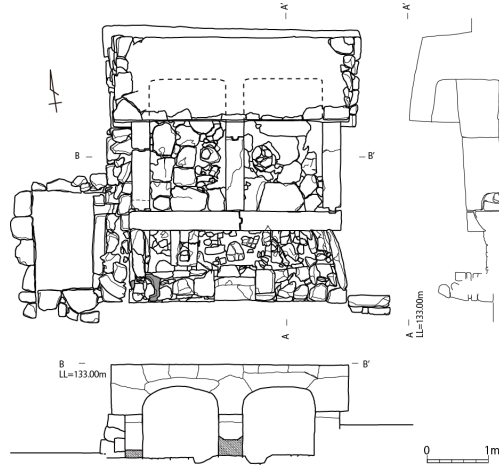


図2 底川村跡 照喜名邸の豚便所跡

石井龍太「近世琉球」の考古学研究：窯業史研究を通じ時代理解の枠組を探る（第50回大会『古琉球・グスク時代・近世琉球：時代認識を問う』特集号）」『琉大史学』20、査読なし（依頼原稿）、2018年、39-50

石井龍太 山本正昭 阿部常樹 久我谷溪太 浦山隆一 鎌田誠史「宮古島狩俣集落 土壘調査概報」『東南アジア考古学会』38、査読なし、2018年、57-61

〔学会発表〕(計5件)

石井龍太「琉球近世近代集落調査報告」『東南アジア考古学会月例会』、2016年

石井龍太「琉球近世瓦の展開と琉球近世史」『沖縄考古学会 2016年度総会・研究発表会』、沖縄考古学会、2016年

石井龍太「近世琉球における津波被害と村落変遷——石垣島安良村跡発掘調査を中心に——」『考古学研究会第63回総会・研究集会『災害と考古学——持続と断絶』』、2017年

石井龍太「「近世琉球」の考古学研究」『琉球大学史学会50周年記念シンポジウム グスク時代・古琉球・近世琉球 - 時代認識を問う』、琉球大学史学会、2017年

石井龍太「島のシマ」『平成30年度平塚市民・大学交流事業「考古学の世界」』、2018年

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし。

(2)研究協力者

なし。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。